



学習に対するメンタルの理解

広島大学大学院教授 松本仁志^{まつもとひとし}文字を通して子どもを理解する
三つのポイントについて、連載でお届けします。

1964年、千葉県生まれ。専門は書写書道教育。光村図書 小学校・中学校『書写』教科書編集委員。著書に『筆順のはなし』(中央公論新社)、『書くこと』の学びを支える国語科の展開』(三省堂)など。

本連載は、書写指導における「子ども理解」の方法や考え方について、次の三点からご紹介していきます。

- ①子どもの文字や書写の学習に対するメンタルの理解
- ②子どもの文字を書く過程に対する理解
- ③子どもの書く(書いた)文字に対する理解



ここではその設定ができないので、一般的に考えられる理由を例としていくつかあげてみます。

(1)漢字の楷書の始筆と仮名の始筆に違いがあることを知らず、手本を見ても違いを認識できなかった。

(2)始筆に違いがあることは知っていたが、筆使いがわからず書けなかった。(書けるだけのスキルがなかった。)

(3)始筆に違いがあることは知っていたが、そこまで気をつかって書くのが面倒だった。

(4)楷書的に書くことがなぜダメなのか納得できず、心情的にどうしても譲れなかった。

理由によって、改善に向けた児童へのアプローチは自ずと異なってきます。(1)(2)の場合は、仮名の特徴の知識と筆使いのスキルが不足していたために書けなかったと仮定するのですから、先に示したような知識・スキル面からのアプローチで十分対応できそうですが、(3)の場合は児童の学習意欲面へのアプローチが、(4)の場合は児童の特性を踏まえたアプローチが必要になりそうです。

また、(1)の場合も、すでに一斉指導で学

1「け」の始筆

今回は、三つの視点のうち、「①子どもの文字や書写の学習に対するメンタルの理解」を取り上げてお話しします。

さて、上の「け」は、下の手本を見て高学年の児童が書いたものです。これを見て、みなさんは、どこ(何)を指導したくなりましたか？多くの場合は、「け」の始筆部分が漢字の楷書的に書かれていて、筆脈からくる平仮名本来の柔らかさが失われている点が気になったと思います。指導者としては、その部分を指摘して、平仮名の始筆の書き方を示範してみせたり動画を見せたりして理解を図ろうとするでしょう。また、該当部分の書き方だけでなく、高学年の指導事項である「点画のつながり」と関連づけ

ながら、平仮名の特徴として一般化できればなおよいと思います。

2「なぜだろう」と考える

しかし、このアプローチは、書写指導における「子ども理解」という点からはいささかも足りません。あくまで知識・スキル面からのアプローチであり、児童の心情面への理解を踏まえたアプローチは含まれていないからです。

そもそもこの児童はなぜ仮名の始筆を楷書的に書いてしまったのでしょうか。前回で示したように「なぜだろう？」とその理由を推測してみることが、当該児童に対する適切な指導を導き出すためには必要になります。理由の推測にあたっては、当該児童が「け」を書いているときの様子やその他の情報も欠かせませんが、こ

る。

・ 下手な文字をごまかすために流行文字を書くようになった。

・ 自分の文字を一度もほめてもらったことがない。

このような自身の文字に関わる負の経験によって、書写の学習に前向きになれない子どもは少なくありません。自分の文字と向き合うことを無意識に拒絶するようになった子どももいます。また、教室では、ディスレクシアやディスグラフィアの子ども、外国にルーツをもつ子ども、左利きの子どもなどの文字マイノリティの子どもも共に学んでいます。このような子どもたちには、心情面への理解とアプローチが最も必要です。その点がおざなりになると、知識・スキル面でいかにうまくアプローチしようとしても、十分に機能しないと思われます。

すべての教科において、一斉指導と個別指導は両輪です。書写指導のようなスキル指導では、特に個々の子どもに対する理解は欠かせませんが、知識・スキル面からのみ子どもを見てしまいがちです。子どもの心情面への理解も大切に